

ストップ子どもの貧困

SOAP

Speaking Out Against Poverty
～夢や希望をうばわれないために～

子どもたち 100 名が
貧困について話しました



Save the Children
JAPAN

セーブ・ザ・チルドレンはすべての子どもにとって、生きる・育つ・守られる・参加する「子どもの権利」が実現されている世界を目指し、世界約 120 カ国で活動を展開する国連公認の国際子ども支援 NGO です。教育や栄養改善、保健衛生などの支援活動に加え、自然災害や人道危機において緊急支援活動にもあたっています。

はじめに

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは世界中の子どもたちのために活動しています。日本での活動の一つに、子どもたち自身が声をあげることで、子どもに関係するさまざまな問題に子どもたちの声を反映し、子どもたちと一緒に解決していこうとする活動“Speaking Out”があります。

今から少し前、“日本の子どもの貧困”について約 100 人の子どもたちがたくさんの声をあげました※1。日本では、「7 人に 1 人」の子どもが他の 6 人よりも貧しくて困っています※2。この現実に対して、子どもたちは、「もし自分がその 7 人に 1 人の子だったら…」と想像して考えました。子どもたちの声をヒアリングし、まとめたものがこのレポートです。

ヒアリングの後に子どもたちは、「言いたいことが全て言えたので、とてもよかった。」というように、本当にさまざまな思いを伝えてくれました。

子どもたちは、どんな声をあげたのでしょうか。

みなさんもぜひ、子どもたちの声に耳を傾けてみて下さい。

【注記】

ここに記載した「子どもたちの声」は、子どもたちが話したありのままの内容を、紹介したものです。そのため、内容によっては大人が読むと深刻さが感じられない、またはどこか他人事のように感じられる「声」も含まれているかもしれません。しかしいずれの場合も、子どもたちが「もし自分が 7 人に 1 人の子もだったら」と、真剣に考え、話してくれた内容です。

また、子どもたちの話したとおりに文章化しているのですが、誤植と思われる表記や、分かりにくい表現も含まれていますが、ご了承下さい。ただし、発言の中に個人名が含まれていた場合のみ、一般的な人称代名詞に置き換えています。

※1：2010 年 7 月～2011 年 2 月まで、京阪神にて実施。詳細は調査概要を参照。

※2：18 歳未満のすべての子どもに対する相対的貧困率。

2009 年 10 月 20 日付厚生労働省発表データでは 14.2%だったが、2011 年 7 月発表データでは 15.7%。

もくじ

はじめに	2
子どもたちの声 その① 「もし自分が7人に1人の子だったら…？」	4
子どもたちの声 その② 「この子のためにできること」	11
調査に参加した大人の声	18
専門家からのコメント	19
調査概要	20
おわりに	21
参考文献	22
ご協力いただいた方々	23

子どもたちの声 その①

「もし自分が7人に1人の子だったら…？」

「もし自分が7人に1人の子だったら、どんなことで困ってる？」
「もし自分が7人に1人の子だったら、どんな気持ちで生活してる？」

この質問に対して子どもたちから出てきた声は、
いくつかのカテゴリーに分けることができました。

貧困と子どもの生活、貧困が子どもからうばうもの、貧困が及ぼす子どもたちへの影響

調査に参加した子どもたちは、彼らの生活におけるありとあらゆる影響をあげています。

「なんて言うんやろ、人間のすべきことが出来ひん。」(中3・15歳・女子)

「きょうだいとかおったら、きょうだいとかの面倒みたり、家事とかしないといけなから、友だちとかはあんまり遊ばれへん。」(小6・12歳・女子)

「塾行きたくても行けない。勉強したくても出来ない。」(小6・11歳・女子)

「ほっときゃ治るやろってめっちゃ言われた。胃腸が悪くて、病院行くときもなんか治るみたいな、そんなん行かんでいい、お母さんかって我慢してんねんから、みたいな。」(17歳・女子)

子どもの貧困は、子どもたちにさまざまな影響を与える、
子どもの権利すべてを侵害するものと言えるでしょう。

貧困と学校生活で必要なもの、学校教育に関わる費用

特に子どもたちが多くの時間を過ごす学校に関する費用の声が多くあがっています。

「なんか体育の時間とか縄跳びとか持ってなくて、みんなにまた忘れたん？とか言ってからかわれそう。いじめられそう。定規とか、そういう三角定規とか、定規セットもない。いつも隣の人に借りてなんか、みんなから嫌われる。」(小4・9歳・女子)

「ちょっとしたことで言ったら、クラブ活動とか入ったときの部費とか、その代金を。学校自体はギリギリいけるけど、他で、教科書を臨時で買わなあかんとか、そういういろんなん重なったときに、買われへんって。」(高2・17歳・女子)

「あたしの友だちが、修学旅行とかになんか、お金がないから行かれへんって子がおった。」(高3・女子)

「やっぱりなんか、お金が無いから行かれへんって、言っても、みんながみんな理解してくれるってんでもないじゃないですか。そっからいじめに発展したりとか。だからやっぱり、そーゆうのがいちばん言いづらいんちゃうかなって。」(高2or3・男子)

その他に子どもたちは、給食費、授業料、教材費(教科書等)、学級費、積立金、通学費、遠足費、文房具類(えんぴつ、消しゴム、筆箱、ノート、定規、三角定規 等)、副教科費(体操服、縄跳び、筆、絵の具、リコーダー、彫刻刀 等)、部活費(ユニフォーム代、テニスラケット等用具類 等)、ランドセル代といった費用をあげています。

このように子どもたちはたとえ学費が無料でも、それ以外に多くの費用がかかること、それがいじめにつながるなど子どもに影響を与えることを知っています。

貧困と社会における子どもの存在、社会的排除

多くの調査で貧困は社会からの孤立を招くと言われていますが
子どもたちの発言からも、それを感じ取ることができます。

「俺だけ?っていう気持ち。なぜに?俺だけ?」(小学校高学年・男子)

「テレビも情報入らへん。」

(調査員: 情報入らへんかったらどうなるん?)

「情報入らへんかったら自分だけわからへんし、危ない目にもあいそうな。今誰だれが手配されてるとか言われても外に夜とか出ちゃったり。地震がありましたとかの情報も入らへんし。」(中2・女子)

「小学校のときに、小学校公立やったから、給食費払えない子がいて、その子は両親が離婚してて、お父さんに引き取ってもらったけどお父さん死んじゃったから今おばあちゃんに育ててもらってる子やって、新聞もとれないし、全然ニュースも知らないし、テレビもないみたいな感じの子やった。」(中2・14歳・女子)

実際に子どもたちは、次のような身近な日常生活での孤立を目の当たりにしているようです。

「ちょっと貧しいってだけで、例えば服とかも、他の子から見た感じ絶対違うって思われたりしたら、本当の事分かってない子やったりしたら、ただ単に仲間はずれにしたり。」(中1・13歳)

「他の子よりも違う感じやから、学校行ったとしても不安やと思うその子が。仲良くできるんかなとか。」(中1・女子)

「学校に喋る友だちがおっても、自分の家の話できんくない?」(高2・17歳・女子)

「家のこととか、友だちになるために色々教えたりするのに。」

「友だちが遊びに来られへん。」(小2~3・8~9歳・男女)

「苦しい気持ちとか、悲しくなる。友だちにからかわれるとき。みんなと違うと分かったとき。」(小3)

多くの子どもたちが、貧困は子ども同士の関係にも影響することなどをあげています。

「なんか周りの子が色んな iPod とか持ってるけど、自分は持ってなくて、で、周りはそのようなことについて色々話してるけど自分はまじられへんから。そういう孤独感みたいな。」(小5・11歳)

「話に乗れないからみんなから透明人間扱いされる。」(小4・9歳・女子)

「他の子が新しいブランド物の服とか着てても、自分はいつも同じ服ばかり着てて・・・悲しさを思い知らされる。」(小3・8歳)

「学校終わった後に、うちらやったらカラオケ行ったりプリクラとったりするけど、そんなあんまりできへんみたいな感じで、グループから外されちゃったりするかな。」(中2・14歳)

「うちらとかやったらご飯一緒に行こやとかあるけど、みんな空気読んで誘ってくれへんかったりして、なんかギクシャクしたりするのは嫌ちゃう。」(高2・17歳・女子)

「友だちも限られてきそうやもんな。あいつ、付き合い悪いなとか、変に疎外感感じる。」(高校生・男子)

「悲しいって思う人もいるかと思うけど、あんまり気にしてない人もいるかもしれん。でも、もし私がそんな立場だったら、皆と同じことやりたいし、それはちょっと辛いと思う。」(中3・14歳)

ゲームや i-pod、携帯電話など流行っているものを持っていなかったり、カラオケやゲームセンターなどに放課後や休日に出かけられないといった、同世代の子どもたちと同じでないことでさらに孤立を感じるようです。

貧困と家族の困難

貧困は子ども同士の関係だけではなく、家族との関係にも影響を与えることについてもふれています。

「お母さんとお父さんとか、仕事行ってるとして、お金ないからずっと働いてるやん。朝とかに帰ってきたりして。ずっと家の中でもひとりぼっちとか。学校でもひとりぼっちやし家でもひとりぼっちやし。」(中1・女子)

「嫌な出来事があったら、お母さんに言えずに、自分ひとりで。」(小3・9歳・男子)

「自分も頑張ってるけど、親が。頑張ってるけど、子どもにまで手が回らへん。働いても働いても貧しいまま。」(高2・男子)

「親にちょっとでも迷惑かけないように、なんとか自分で出来ひんやろかって思うけど、何にもできないから。」(中3・15歳・女子)

「一人でおったら不安もだんだん大きくなっていく。お父さんとかお母さんとかおったらわいわい楽しく話したり、そういうこと考えんですむけど、やっぱ時間が長く感じる。しーんとしとして、だんだん考えるようになる。」(中1・女子)

「旅行に行ったりとか、いつもよりいいご飯食べるとか、いつもよりいい服買うとか。」
「クリスマスも誕生日もなしじゃない。」
「信じられへんそなん。」(高2・17歳・女子)

「なんか欲しいって言われへんよな。」(高2・17歳・女子)

「お母さんに言ったって困らせるだけやなって思ったら余計に何も出来へんかな。」
(17歳・女子)

子どもたちは、親が苦勞していることを理解し、親を思い、自分一人で貧困と向き合っているようです。

貧困と自分自身のとらえ方

「ちっちゃくなるっていうの？気持ち的に。」(中3・15歳・女子)

「肩身狭い感じで。なんか自然と生まれる劣等感みたいな。なんも自分悪いことしてないのに、例えばハーモニカやっても自分何にも出来ひんし、みたいな。ちょっとしたことが出来ひんけど、他人から見たらちょっとしたことかもしらへんけど、自分からしたら結構、こう…。」(中3・15歳・女子)

「絶対遠慮してしまうやろ。ってか、もし自分がその立場やったら、そういう面に関してはあんまり触れんといしてほしいと思う。例えば、周りの人が自分のことを貧しい子やなって思ってたとしても、あんまりそれに関して”あ、そうやんな”って感じで逆に気いつかってもらったりしたら、逆に俺やったら嫌かなっていうのはある。」(18歳)

「この子は他の6人よりは貧乏やから、何か欲しいとかあると思うけど、そういう自分が恥ずかしい。うちやったら感じる。周りは自分よりはお金持ってるし、欲しいものも

「持ってるけど、自分は貧乏で、欲しいとは思ってるけど、そういう自分が嫌になる。」
(中2・女子)

「家とかにいていいんやろうか。皆が頑張ってくれてるのに。自分だけこんなに楽しめていいんやろうかとか。」(中1・女子)

「他の子とは違うから、色んなこと考えていくにつれて、自分生きてていいんやろうか、とか、そんな感じになると思う。」(中1・女子)

「みじめ。」

「家帰りたくない。」

「なんで自分だけとか。」

「逆ちゃう、学校行きたくない。ずっと1人でありたいとか。」

「誰にも見られたくない。もうずーっと引きこもり。」

「家帰ったらしんどそう。」

「生活が暗くなるよな、絶対。」

「もしかしたらあれちゃう、親恨むかしらん。」

「なんでうちだけってなる。」(高2・16～17歳・女子)

このように子どもたちは、貧困が子どもたち自身の存在をも脅かしてしまうだろうと考えています。

貧困と子どもたちの可能性、機会の喪失

子どもたちは貧困が与える将来への影響についても話しています。

「夢がなくなる。」(小学高学年・男子)

「正直なんか良い学校に行こうと思ったら学校の勉強だけじゃ足りない部分って絶対あると思うし、塾に行こうと思っても行けれへんかったら、良い学校行けれへん、就職も出来ひんみたいな。極端かもしらへんけど。」(中3・15歳・女子)

「将来奨学金借りたとしても返せるか分からない、仕事があるか分からないから、行きたい大学に行けないっていうこと結構聞いたり。」(17歳・女子)

「中学出たらすぐ働かなあかん。」

「で、働くにしてもそれこそあんまり良い仕事出来ひんから、またその子の子どもも貧乏になってみたいな。」(中3・14～15歳・女子)

「なんか絶対勉強のこととかだけじゃなくて、なんか色々経験不足な、友だちと遊んで感受性とかそういうのを遊んでなかったりしたらその子はあんまり培われてないま

ま育って、人間付き合いとかも苦手やったら仕事も難しい、と思います。」(中3・女子)

「将来子ども産む気とかも失せるんちゃう、自分がこんなんやったから、とか。」
(高2・17歳・女子)

貧困の連鎖は、他の研究からも明らかになっていますが、子どもたちも、貧困が将来にわたるさまざまな可能性もうばい、さらにそれが世代を越えて連鎖していくものであるということを知っています。

貧困と向き合う子どもたち

「お金がなくてもっていうのを証明してやるってか見せつけてやる。」(17歳)

「親めっちゃ頑張ってるのに貧乏やったら、そんなんあれちゃう。親が何もせんくて貧乏やったら恨むかしらんけど、親が頑張ってるんやったら自分も頑張ろうってなる」(高2・17歳・女子)

「逆に、見てろよこんにやろみたいなの。お金なくてもうまいことやってったるわみたいな。」(17歳・女子)

「無理に笑顔作ってそう。なんかみんなと同じになろうとして、めっちゃなんか陰で頑張ってるそう。」(小5・11歳・女子)

「家族がおったら楽しい。」

「きょうだいとかおればな。」

「そう。きょうだいとかおったら。」

「一番やろ。」

「苦しみを共に分かち合えるねん。」(高2・17歳・女子)

「家に帰ったらさっき言ってたけど、勉強とか頑張ってるちゃんとした学校とか高校もちゃんとしたところに行きたいと思うかもしれないし、奨学金もとりたいたいとか考えてるかもしれないし。お金がないことで不自由になった分、他のところで皆に追い付きたいなと思ってるかなって思う」(中2・14歳)

これらの声は子どもたちが前向きに乗り越える力を持ちあわせているということを教えてくれます。

子どもたちの声 その②

「この子のためにできること」

「みんなが総理大臣、もしくは大人だったら、この子のために何をする？」

最後に、この質問に対する子どもたちの声を聞いて下さい。

金銭面、物質面での支援

今回のすべての調査先で子どもたちは次のような声をあげています。

「お金をあげる。」

「お金をあげる。」

「お金をあげる。」(小4～小6・9～12歳)

「みんなと同じくらいの服とか食べ物をあげる。」(小3・9歳)

「もっと医療とかを、ほんまに必要な人たちに使わせてあげられるように。」

(中3・14歳・女子)

「公共機関とかはタダ。」(高1・16歳・女子)

「生きるのに最低限必要な病院とか、公共料金とか水道料金、あと学校のお金は負担できるようにしたいと思う。」(17歳・女子)

「勉強道具とか買ったり、困らないようにしてあげたい。他の子とは並べないけど、普通の感じの生活に。貧乏すぎたら可哀想やから、普通な感じの生活に。」(中1)

支援の際に気をつけること

子どもたちは支援をする際に、次のような配慮が必要だと言っています。

「学校とかに必要なものを全部揃えてあげるとか、できると思います。」

(調査員：それはその子にとって？まわりの子とかも一緒とかじゃなくて？)

「買えない人たちに。例えば、小学校だったらランドセルとか、高いもの。机とか高いじゃないですか？最低限勉強にいるものを買うとか。ノートとか、そういうのを。お金とかも。」

「そうすると、いじめとかもあるかもしれんから、

1年の始まりにみんなにばって支給するのもいいかもしれん。」(中2・14歳・男子・女子)

「学校の奨学金を増やして高校の無償化をなくす。有償化にする。逆に貧しい人だけ授業料免除とかを増やす。種類増やしたりとか。」(17歳)

「学校に働きかけるかな。奨学金とかやったら家から申し込まなあかんしそれって子どもが教師にお願いしますって出さなあかんくて、それって嫌かもしれんし、皆が見てる

ところで出すのとか。だからそれやったらそれを学校から情報を仕入れて、この子はこうやねんな、減らしますっていうのを親とやり取りして子どもに感じさせない。」(17歳)

「学校から、ってか政府の機関から出る、子どもたちに、7人に1人の子に直接出るようにするべきやと思う。」(10代後半)

「定期的にやっぱ、7人に1人の家庭にも支援してほしい。一時的なものじゃなくて、定期的がいいかなって思う。」

(調査員：定期的ってどんくらいがいい？月1とか、毎年とか。)

「月1回とか？」

(調査：月1回入ってきたらいい感じか。)

「わからんけど…。」

(調査：みんなは？)

「母子手当、毎月にしてほしいかな。」(高校生)

就労支援、自立支援

子どもたちからは、金銭や物質的な支援以外にできることについても出ています。

「なんかよくわからないけど、お金あげるのはいいいけど、もらってる身からしたら、お金もらえるのは嬉しいけど、やっぱりもらってるっていうのはちょっと…。なんていうか、嫌じゃないけど、もらってるよりはちゃんと自分で稼ぎたいと思うから、そういう人ってあまり仕事がもらえないじゃないですか、だからちゃんと仕事を与えてあげる。」(中3・14歳)

「貧しくない人が、いっぱい買い物する。買い物するためには色んな会社が動くから、例えばパンとか買うんやったら、小麦を買って、牛乳を買ってとか、そういう色んなことがあるし、そういう買い物もいっぱいやったら、そのそれぞれの会社がそれぞれもうかるから、給料もいっぱい出るし。だから、いっぱい買う。」(小5・11歳・女子)

「その人のために、えーっと家買ってあげたり、食べ物とか買ってあげたりして、仕事とか入らしてあげたりして、お金がたまってきたら、それで暮らせるように、ひとりで暮らせる練習して、ひとりで暮らして。ひとりで暮らせる練習をする。」(小3・9歳・女子)

「自分の子どもをこんな風にしないように、自分で一生懸命働いて、お金かせいで、自分の子どもを学校に行かせて、辛い思いをさせないようにしたい。」(小3・9歳・男子)

子どもたちは雇用創出や自立支援といった方法もあげ、貧困を食い止める方法についても語っています。

状況理解

さまざまな支援の方法があることを子どもたちは指摘していますが、支援の前に次のようなことが必要だと言っています。

「アンケートとろ、まずアンケート。(中略)アンケートって、やってほしいことを聞いて動く。」(高2・17歳・女子)

「こういう子があるからモノをあげようっていう前に、そこに行って、その人たちの状況を知る。だからまず会う。」

「まず会うのいい。そうやって情報だけに頼って、いいこともあるけど、やっぱり自分の目で確かめたほうが性格的にこうやったらいいんやなって思う。テレビとかだけやったらちょっとしか情報入らへんやんか。実際行ってみたら、ああまだこんな困ったことがあるんやって。」

「うちは、その子と同じ一回生活してみる。同じ生活の中で分かることももっと多いから。同じことして、その子の苦しみを分かってあげて、その子から信頼得る。生活してみたら分かることもある。話すだけと、一緒に生活するのとまた違うと思う。そこまでする人が一番いいと思う。自分口だけじゃあかん。もっと行動に出さなあかん。」

(中1~2・女子)

「やっぱり政治やったら対策っていうより、もうちょっと周りの…みんなの意見を取り入れてほしいっていうのが。なんか勝手に政治家の人らだけで話し合っても、その政治家内だけで結論が出ても、周りの人がそれを受け入れるか受け入れへんかとか、勝手に決められても困るというか。」(高校生)

すべての子どもたちのために

子どもたちは、すべての子どもたちが幸せに暮らしていけることを望んでいるようです。

「その子のことばかり考えてたら違う人が困るときもある。その子のことばかりじゃなくて、違う子のことでも考えなあかん。」

「要するに皆のことを考えて、政治を進めていくことで…。」

「7人のことを全員考えなあかん。」

「全員の生活を調べていって、皆にいい暮らしを。」(中1~2・女子)

私たち一人一人ができること

貧困下の子どもたちに思いをはせ、理解しようとする声も出ています。

「家においてあげる。そしてなくさめてあげる。」(小5・11歳)

「ひとりになっちゃうって言ってたじゃないですか。友だちと。みんなが仲間はずれにされる。みんなと一緒に遊べる公共施設、だから学校外で、学区外の子も集まって、ボードゲームだったり、人生ゲームだったり、いろいろ置いたりして、交流を深めあってそこで友だちをつくるっていう。」(中2・14歳・男子)

一方で子どもたちは、子どもの貧困問題が社会に周知されていないことも認識し、次のように話しています。

「なんか、分かってない人が、多すぎると思う。」(高校生)

「なんかほかの、えらい人とかにも、みんなこういう人がいるよ、困ってるよっていうのを発表して、それで、その周りの人がもっと気をつけてあげる。」(小3・8歳)

「知ることが大事やと思う、ホンマに。」

「学ばないと。」

「ほんで、その貧困の人らも学べる環境を作るべきやと思う。その環境を政府がつぶしてると思う。」

「そもそも早急にやらなあかんと思う。この子らが大人になっても、もっと悪くなると思う。」

「貧困の人らが学んで、その人らが活動することが、一番政府が分かりやすすくない？実際にそういう人たちが活動することによって、その現状を直接聞くことで、間のほかの人らから通して聞くんじゃなくて、デモとか自分らで学んだ知識をいっぱい使って、行動せえへんかったら、ホンマにやばいんやって政府も伝わらんと思うし、うちらにも伝わらんから。」

「政府がなんとかしてくれるから、政府が悪いねんじゃなくて、日本の、貧乏な人らが集まってこういうことをして欲しいんやっていうことを言ったら、結局は政府の上の方の人より、下の方が人数多いねんから、動いてくれると思う。それで動かへん政府が、そしたらおかしいと思う。」

「そういう人、いるんかなあ？」

「だからそういうのをできるようにしやなあかんっていう、環境を。」(高2・17歳・女子)

「知ることが一番大事やろ。知らへんかったら行動も起こせへんし。」(高2・17歳・女子)

調査に参加した大人の声

調査員の声

調査員たちは、調査に参加して次のような感想を語っています。

①子どもたちの声から見える貧困

「(調査であがった)意見は自分の身の周りで起こっていることなども参考にされており、日頃から無意識のうちに子どもの貧困と向き合っているのだなと感じた。」

(22歳・学生・男性)

「子どもの貧困について調査していると言っても、大学の講義や本で読んで少し知っている程度で、”こんな身近なところで起こっているのか”と、改めて深刻さを感じた気がします。」(21歳・学生・女性)

「子どもたち特有の問題を、生々しく教えてもらうことで、子どもを取り巻くシビアな状況に気付きました。」(24歳・インターン・女性)

②子どもたちの様子から気づく子どもの力

「予想以上に子どもたちが大人や社会のことをシビアな視線で見ていること、柔軟な発想力を持っていることに気付いた。」(24歳・インターン・女性)

「子どもたちの声はとてもインパクトのあるものでした。(略)子どもたちは生活に立ちあらわれるよりリアルな側面をきちんと認識しているなと感じました。」

(24歳・大学院生・女性)

③子どもたちの声で自分自身が変わったこと

「子どもへの見方が180度変わりました。未熟な子どもというよりは、社会の一員であるという子ども観を抱くようになり、その子どもの力を最大限に引き出すためには大人のサポートが不可欠であるということを感じています。」(24歳・大学院生・女性)

「マイナスな意味での子ども扱いはしたくないなと思うようになった。」(22歳・学生・女性)

「主にバイト先の学習塾ですが、子どもの言うことに対し、”子どもの言っていることだから”という先入観がなくなり、真剣に聞くようになりました。」(24歳・インターン・女性)

「調査に参加することで、当事者の声抜きでは物事の真相真理を語れないことを痛感し、調査以後は興味や関心を持つことに関してはできるだけ当事者の思いを知ることが心をかけています。」(24歳・大学院生・女性)

④子どもたちの声が社会を変える

「子どもが”もっと話したい”と思っていることも伝わって、子どもは子どもだけのコミュニティに押し込められていることも感じました。この子たちがもっと世間や大人にもものを言えるような世の中にできればいいなと思います。」(24歳・インターン・女性)

「子どもたちは、貧困に対しての後ろ向きな意見ばかりでなく、貧困と向き合い、”どうにかしたい”、”なんとかしたい”という想いから自分自身の考えをしっかりと持っているということに気づかされた。こういった子どもたちの声は、きっと現在の子どもの貧困という問題を切り開く一歩になると感じている。」(22歳・大学生・男性)

調査実施先の大人の声

普段、子どもたちと接している調査先の方たちが、
子どもたちにとっての調査の意味を話して下さいました。

①考える場としての調査

「子どもの貧困を海外に限定された事例とだけ見ていただけに、初めはピンと来なかったようだが、少しは意識するようになったように思う。」(35歳・NPO職員・男性)

「あくまで想像ですが、参加者にとって、貧困について、あらためて考える機会は、あまりないと思われます。そういう意味では、貴重な思考と問題提起の場になったのではないのでしょうか。」(45歳・青少年社会教育施設職員・男性)

②意見を伝える場としての調査

「調査というと重い話というイメージを持っていたようだが、ヒアリングの方法が作業をしながら楽しい雰囲気ですすめてもらったので彼らとしてはやりやすかったのではないか？」(52歳・教員・男性)

③調査が子どもたちに影響する将来への期待

「数字をはじき出す事はもちろんの事、こんなふうに丁寧に子どもの中にはいて、生の声を聞き取り調査される手法は、数字以上に貴重なものを残していくと思います。」(45歳・青少年社会教育施設職員・男性)

専門家からのコメント

安部 芳絵 氏

子どもが語ること、そこから生まれるちから。

この調査に答えてくれた子どもたちは、必ずしも自分が“貧困である”わけではありません。しかし、彼らは貧困について語るができます。子どもたちはおとなが考えているよりもはるかに多くのことを見聞きし、友だちの経験や身近なことからして貧困を知っています。そして、語ることを通して、貧困がその子だけの責任ではないこと、だからこそ社会全体で考えていかなばならないことに気づき、たくさんのアイデアを示してくれました。

私たちは、「恥ずかしい」「みっともない」という貧困に向けられた社会のまなざし(スティグマ)によって、貧困について語ることを避け、目をそらしてきました。けれど、今回の調査に協力してくれた子どもたちは、いつの日か貧困に直面したとき、貧困から目をそらすのではなく、どうしたら社会全体の問題として解決できるかを考えることができるにちがいありません。

同様のことは、東日本大震災を経験したすべての子どもたちにあてはまるでしょう。たとえば、おとなは「被災した子ども」=かわいそうな子、弱い存在として捉えがちです。確かに、大切な家族や友人、想い出を奪われ、立ち止まることもあるでしょう。一方で、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが被災地の子ども1万人を対象とした調査からは、9割の子どもたちが復興に向けて自分たちもなにかしたいと考えているようすが伺えます。子どもたちは、さまざまなアイデアをもっている復興の主体でもあるのです。

被災地以外にクラス子どもも、災害について考え、どうしたら自分と大切なものを守れるのか考えることができます。そのためには、子どもが語り、おとなが聴く場が必要です。

子どもたちは、考えや気持ちを語ることでさまざまな課題に気づき、問題解決のための力を身につけていきます。次は、わたしたちおとなが、子どもたちの声を受けとめ、動き出す番です。

安部芳絵(早稲田大学文化構想学部助教)

阿部 彩 氏

東日本大震災を受けて、子どもたちの貧困の問題はますます深刻になってきています。自然災害は誰にも分け隔てなく襲いかかりますが、時間がたつにつれて、災害から立ち直る余力の差がはっきりとしてきます。社会的弱者は、そのまま災害弱者なのです。被災した小中高生に対する就学支援金が、政府の想定した人数をはるかに超える数の児童からの申請がなされて追加予算が必要になっていることからわかるように、子どもたちの生活を守るための早急な対応が必要です。

震災による二次的、三次的被害も心配されます。震災や津波、原発事故の直接的な被害を被っていないくても、経済低迷、産業の崩壊、それらによる失業、減収は、被災地のみならず、日本全国に波及します。リーマン・ショックなどのこれまでの経済的ショックと同様に、震災ショックの影響は労働市場に底辺にある人々を直撃します。被災した、しなかったに関わらない子どもの貧困対策が喫緊の課題です。

今回、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが、子どもの貧困について子どもたち自身の声を拾い上げたことは重要です。今まで、子どもの貧困の議論ではいつも「昔の子どもに比べて今の子どもは贅沢だ」などの大人の「解釈」が付け加えられてきました。しかし、今の子どもにとって現代の貧困に育つことがどのような意味を持つのかは、今の子どもにしかわかりません。

子どもたちの声は、彼らが貧困についてシャープな感性で理解していることがわかります。一部には、貧困などの議論を子どもたちに伝えることは差別や偏見に繋がるので、よくないという声があります。しかし、子どもたちは敏感です。隠していても、子どもたちは察し取ります。今回の調査では、子どもたちにこの問題をオープンに話合っていたいただいたことで、政治家の方々にも聞いてほしいような提案がいっぱいなされました。大人は子どもたちの声をきちんと政策に反映させていかなければいけません。

阿部彩(国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部長)

調査概要

本調査は、日本に住む子どもたちが日本の子どもの貧困についてどのように捉えているのかについて 2010 年 7 月から 2011 年 2 月にかけて、聞き取りを行ったものです。

対象者は、京阪神エリア(京都、大阪、兵庫)に在住もしくは通学する小学校 1 年～高校 3 年までの一般の子どもたち 104 人(内、小学生 47 名、中学生 25 名、高校生 32 名)です。本ヒアリング調査の趣旨に賛同して下さった NPO、地域のスポーツチーム、学校など合計 14 団体を通じて募集を行い、その団体に属し、参加を希望した子どもたちを対象としました。どの団体を通じて募集を行うかに関しては、在住地域、学年、性別など子どもたちの属性に多様性を持たすことに留意しました。

ヒアリング調査は、3～9 名までのグループ(平均 5.8 名)に対し、調査員 2～3 名で実施しました。基本は 5 名前後の少人数グループとし、全ての子どもに配慮できるように行いましたが、高校生に関しては、彼らにとって話しやすいフリーディスカッション形式で、5 名以上の人数で行いました。調査員は、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンがトレーニングした大学生・大学院生・大学卒業直後の 20 代前半の若者により構成されています。子どもたちと近い、「ことな」世代の者がヒアリングを行うことにより、子どもたちが普段友人と話している時のように緊張することなく、話しやすい環境を作ることをねらいとしました。

また、ヒアリング調査では、下記 4 点のルールを設け、子どもたちと約束の上実施しました。

【参加】 せっかく集まったので、どんどん話をして欲しい。

ただし話したくないことは話さなくていい。

【尊重】 他人の意見を否定しない。

【守秘】 ここで話した意見はこの場だけにとどめる。他の場所で話さない。

【自分のことは話さなくていい】 自分の体験について話すのではなく、自分の意見を話す。

※実体験を話すことで子どもにとってあまり良くない影響がある可能性があると考え、話さないことと判断しました。ただし、高校生に関しては、自己判断のうえ支障のない範囲で話してもよいことにしました。

おわりに

子どもたちの声、みなさんに届きましたでしょうか。

ある子どもがこんな風に言っていました。

「テレビとかでも、貧困についてやっても、こーゆう可哀想な面があるみたいな感じで放送するから、みてる人も、あ～可哀想なんかと試ってみるときもあると思う。」

同じように、大人は、もしかしたら今あるイメージの中でしか子どもたちを見ていないのかもしれない。でも、このレポートの子どもたちの声は、私たちが想像する以上に力と奥深さを持っていたのではないのでしょうか。このレポートを読んで下さったみなさんのように、子どもたちの声に耳を傾けてくれる大人が多くなることを願っています。

子どもたちの聞き取りを終え、このレポートを準備していたところ、東日本大震災が発生しました。今回の震災は、貧困を悪化させ、新たに生み出す要因となり、子どもの貧困問題にも影響を与えるでしょう。

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは、震災直後から被災地に入り、現在も子どもに関わるさまざまな活動を行っています。

(詳細は HP をご覧下さい。URL:<http://www.savechildren.or.jp>)

"Speaking Out" の活動については、子どもにやさしい地域づくりを目指し、復興計画や復興に向けたまちづくりに子どもたち自身が声をあげ参加することを目指すという形で、継続して活動を行っています。

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは、これからもすべての子どもが夢や希望を持てる社会の実現を目指し、子どもに関わる問題を、子どもたちとともに解決していけるよう、活動を展開し続けていきます。

最後に、声をあげてくれた子どもたち、

子どもたちに声をあげる機会を作っていただきました、すべての方々に感謝いたします。

参考文献

Goretti, H. (2009) Speaking Out Against Poverty in Northern Ireland, Save the Children UK.
http://www.savethechildren.org.uk/en/docs/SOAP_Booklet.pdf

Crowley, A. and Vulliamy, C. (2002)
Listen Up! Children and young people talk about poverty,
Save the Children, Cardiff.
http://www.savethechildren.org.uk/en/docs/wales_lu_pov.pdf

子どもの貧困白書編集委員会編
「子どもの貧困白書」明石書店, 2009年

浅井春夫・松本伊智朗・湯浅直美編
「子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために」明石書店, 2008年

阿部彩
「子どもの貧困—日本の不公平を考える」岩波新書, 2008年

奥田陸子編著・監修、特定非営利活動法人子ども&まちネット企画編集
「ヒア・バイ・ライト(子どもの意見を聴く)の理念と手法」萌文社, 2009年

ご協力いただいた方々

企画・監修：徳丸由紀子

編集：長谷川有美子

イラスト・デザイン：たかはしなな

調査員：

朝田 裕子 / 岩崎 なおき / 菊池 友里恵 / 佐竹 美佳

しゃっく / 多田 莉子 / 山下 遥

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン インターン：

足立 ころこ / 坂田 のぞみ / 中村 悠 / 真屋 友希

その他ご協力者：河合将生(関西国際交流団体協議会)

一部匿名・敬称略・五十音順

調査にご協力いただいた団体：

ECC 社会貢献センター

WITH ～高校生国際ボランティア～

大阪府立西成高等学校

大阪府立松原高等学校

門真フェニックス

関西こども文化協会

高槻市立第4中学校

つくるところ

高槻市立富田青少年交流センター

寝屋川市教育委員会

Youth Theatre Japan

立命館宇治高等学校

立命館宇治中学校

Re:C

敬称略・五十音順

■□ 問合せ先 □■

公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

〒101-0047 東京都千代田区内神田 2-8-4-4F

TEL : 03-6859-6869、FAX : 03-6869-0069

E-mail : soap@savechildren.or.jp

<http://www.savechildren.or.jp/ers/soap/index.html>

© all rights are reserved 2011

